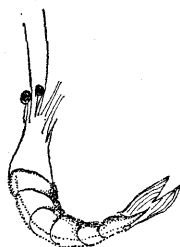


雑感——一九八二年の年末に



津 守 真

今年、梅雨から引きつづいて夏になって、炎暑にならず、異常な夏だと云っている間に、雨から台風へと続く秋になってしまった。まだこれからどんな天候になるのか、例年の予想どおりにはいきそうにない。でもこれは日本中の人がいま同じ境遇の中にあるのだし、世界情勢の異常と不安も、一九八二年を生きた世界中の人が、それぞれの見方は違うにしても、共通に体験してきたことである。

今年の夏、私は、大分県で学法の幼稚園の大会の機会に、国東半島を訪ねるこ

とができた。日本の古代文化が、奈良と競って九州の北端の半島で栄えたことは不思議に思っていたが、ほんのわずかではあったが自分の足でこの地を見たのは幸いだった。あちこちで、石や崖に刻んだいわゆる磨崖仏に出会い、その表情が、奈良や京都の仏像の深遠な、ときにと観念的な静かさとは違って、人間的な活力を感じさせられた。荒削りの目と鼻の大きな仏がまたがっている動物は、牛とも猫ともいえるひょうきんな顔だったし、不動明王の鼻の穴はとくに大きく、息をしている鼻だ。石に深く刻まれ

た顎と口には笑っているようなユーモアがあった。私は耶馬台国論争に格別の興味をもっていたわけではないけれども、ここにくると、松本清張が「陸行水行」という短編で云うように、魏志倭人伝の「水行十日陸行一月」という旅程で古代の韓国から来ることができたのはこのあたりだったのではなからうかという推理的興味をもたされてしまう。活気のある大らかさを示すこの石仏たちは、大陸文化の直接の息吹を感じさせる。古代には、韓国とか日本とかいうまとまった国家観念が現代のように際立ったものでは

なくて、近隣の島にゆく心安さがあった
往來したのではないかと私は考えさせら
れた。そして、きつと大らかに人間とし
て近隣の国の人たちと交際したいとあら
ためて思った。

この夏、私は南と縁があった。沖繩タ
イムス主催の保育セミナーに招かれ、沖
繩の保育園の先生方の熱気にふれること
ができた。沖繩は、私は、丁度二十七
前に認定講習の講師として四十日間滞
在したことがあったので、たのしみにし
て出かけた。当時の沖繩は、まだ敗戦と占
領の傷の只中であつた。昼も夜も地の下
から背中が熱せられるような暑さに耐え
られず、一時間もかかつてバスに乗って
那覇で唯一冷房のあるレストランに冷を
求めた時代であつた。今回、冷房完備の
那覇のホテルに泊り、観光店が街路の両
側に立並ぶ国際通りを、快活な若者の群
にまじつて歩き、頻繁な台風にも微動だ
にしない民家の変貌を見て、悲惨からの

復興に安堵すると共に、時代の変化を感
じさせられた。以前に私が滞在していた
のは、與那原と糸満で、本島南部の激戦
地だつた。私は何週間も泊めて頂いた家
など訪ねたいと思ひ、セミナーの翌日、
那覇からバスで約一時間海沿いに南の方
に下つて糸満に行つた。むかしの石垣は
ブロック垣にかわり、瓦の平屋根の家々
は鉄筋コンクリート建築となり、お世話
になつた家は遂に見付けることができな
かつたが、講義をしていた糸満小学校
は、建物は立派になつて昔の面影をとど
めていた。校長先生は御不在で、私は帰
路、校庭の一隅にしばらく立っている
と、女の先生が三人追いかけてこられ、
一食を誘われた。私も久々の土地であ
り、喜んで、一緒に食事をした。話を交
わしてみると、三人の先生方は、私のク
ラスではないけれどもかつて認定講習を
受講された方々だつた。当時のことなど
懐かしく、話は戦時中のことにまで及ん
だ。私は糸満に滞在してひめゆりの塔は

遠くない所だつたので、大地に穴をあけ
ただけのあの壕に何度も足を運んだこと
があつた。女高師を卒業直後に沖繩第一
高女に赴任し、ひめゆりの塔で最後を遂
げられた親泊千代さんは、私の妻の姉と
女高師の同窓で、大塚の学内寮で隣室同
士だつたという気持の上での親近感があ
つたことにもよる。昼食を共にしなが
ら、話題がそのことになつたとき、一人
の先生が親泊千代さんの教え子であるこ
とを語られ、私共はその生涯を偲んだ。
三人の女の先生方とは、互いに名も知ら
ないまま別れたが、忘れられないひと時
であつた。

そのあと、私はひとり白梅之塔を徒歩
で訪れた。二十七年前に沖繩にきたと
き、女高師の同窓会である桜蔭会の方々
が十人程集まつて下さり、こもごも戦争
の体験を話されて後、沖繩第一高女の校
長としてひめゆりの隊長であり、当時琉
球大学の学長をしておられた仲宗根政善
氏著「沖繩の悲劇」を私に十冊託され

た。私は後にそれをお茶大と附属校園に配って歩いたが、米軍の艦砲射撃に自分たちも傷つきながら、負傷した日本兵の看護をしつつ、南へ南へと逃避行をしてゆく女学生たちの姿が刻明に描かれている。その中には軍人たちが、共に逃げてゆく住民、女、子どもを壕から追出し、

泣く赤子の口をふさぐ場面なども記されている。「かなしさのあまり井戸までかけたけれど水くみし子の足跡もなく」「めしひなるつわものつれて乙女このぬばたまの夜を麻文仁へ去りぬ 仲宗根政善」私はかつてその足跡を辿りつつ、那覇から南風原、東風平、真壁、伊原、摩文仁へと歩いたことがあって、途上、沖繩第二高女の若い人たちの自決の壕に立てられた白梅之塔を見付けたので、今回もそこに立ち寄りたいと思ったのである。そのとき、初老の夫婦が御馳走を持ってきて塔にささげては食べており、私は胸つまる思いで、ここで最後をとげられた娘さんの話をきいた。いま、糸満か

ら白梅之塔へゆく山路は、地図には載っていないけれども、荒れていて通行できない。致し方なく、遠回りしてバス通りを歩かねばならなかった。白梅之塔の記念碑はいまは観光客の目にもめったに触れないだろうから、せめて碑文だけここに記しておきたい。

「県立第二高等女学校、三、四年生は、昭和二十二年三月より、第二十四師団野戦病院に於て看護実習訓練を受け、三月二十四日看護婦として東風平村富盛の八重瀬岳にある同師団第一野戦病院に入隊、戦傷者の看護に当たっていたが、六月上旬同地を出発し多くの犠牲者を出しながらも傷ついた患者を助け此の地に移動し看護に専念していた処 六月二十日攻撃を受けてここで最後を遂げた」

簡単だけれども痛切な記述である。そのわきに白梅学徒看護隊自決之壕が、いままも生々しく口をあけている。

丁度、今度も台風が近づいていて、翌日保育園の現場を見せて頂く約束をして

いたのに、予定を変えて早朝の飛行機の便で帰ってきたのはあとになると残念な思いである。

沖繩に発つ前後から、教科書問題が大きく新聞に報道されつつけた。こんな自明なことは、まず、人間として率直に非を認めないと、何もかもがはじまらない。中韓と沖繩とを区別して事実を扱うなど、あまりに日本的すぎる。

八月某日の朝日新聞の「折々のうた」には前川美佐雄の次の歌が紹介された。「かかる日にたしなみを言ふは愚に似れどひと無頼にて憤ろしも」という歌であって、大岡信の解説に「戦争末期、米軍機の空襲が激化してきたため家族を鳥取県の上奥へ疎開させた時の山陰戦事の中の感慨を歌う。……こういう歌を読むと、昨今のことを歌ったようにも思える」と述べられている。この夏、新聞紙上で、また路上で、私の胸につまっていたものをことばにくれたような気がして読んだ。

夏の終りに、例年私が出席する会合が

二つある。一つはみどり会の講習会であり、もう一つは御殿場コロニーセミナーである。前者はお茶大の幼稚園教育臨時養成課程の卒業生が中心になった会合で幼児教育の人達にはよく知られているのでここでは触れない。後者は、精薄児、精薄者の施設、学校の人たちを主とするセミナーで、約四十人で三泊四日のセミナーである。牛島義友先生がはじめられ、本年度で二十回になる。毎年、私は朝六時半からのメデイェーションを担当している。今年私は私と考えるとところがあって、創世紀十二章の「時に主はアブラムに言われた、『あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。』……アブラムは主が云われたようにいで立った。」という箇所をテキストにして語った。人生の新しい出発

とは、人間の精神史の最も古いテーマのひとつである。

このセミナーでもうひとつ例年私を感じることは、集まる人がどこから来て何をしている人かということをはじめに問題でなくなり、三泊四日の後には共通の生活に参加したという思いだけが残ることである。精薄の仕事と幼稚園保育園の仕事についても同様のことが云える。人間を相手にする仕事として、両者は、考え方においても、指導の方法においても共通のことが多い。もちろん、相手がかわれば具体的なことは全く違ってくることもあるが、それでも、普通に考えられている以上に共通点が多いのだと私は思う。どちらも、それぞれ相手から学ぶことが多いことを私は長年経験してきた。これからの時代にとくにそうだと私は思う。

「幼児の教育」誌についていえば、本年はとくにお茶大の関係者による記事が多かったかと思う。この雑誌が本学の前身である女高師で創刊され、長年本学で編集されてきたことを思えば当然のことでもあるが、だからと云って、決して一つの大学の党派的立場によるものではない。時代の流行に左右されないで、幼児教育の本質を考えつづけることが、この雑誌の使命であると私は思ってきたし、今後もそうであるように願っている。明日の幼稚園の現場に役に立たないという批判をたえず受けてきたけれども、昨日も今日も明日も、幼児教育の根底に流れるものを考えつづけることがこの雑誌の使命と思っている。現実には不十分なことが多いけれども、この雑誌が、一大学のためでなく、幼児教育の本質を守るためのものとして、執筆者にも読者にも御協力をお願いする次第である。